



暗号舞踏人の謎

コナン・ドイル
三上於菟吉 訳

ホームズは全く黙りこんだまま、その脊の高い瘦せた身体を猫脊にして、何時間も化学実験室に向っていた。そこからは頻りに、いやな悪臭がただよって来る、——彼の頭は胸に深くちぢこめられて、その恰好は、鈍い灰色の羽毛の、黒い鳥冠の奇妙な鳥のようにも見えた。

「そこで、ワトソン君、——」

彼は突然に口を開いた。

「君は南アフリカのある投資事業に、投資することは、思い止まってしまったのだね」

私はサツと驚かされてしまった。私は彼の不思議な直覚力と云ったようなものには、毎度のことによく慣れていたが、しかしこの私の胸中の、秘中の秘事にずばりつと凶星を指されたのには、全くあきれ返ってしまった。

「一たい君は、どうしてその事を知っていたのだね？」

私は訊き返した。

「さあワトソン君、ぐうの音が出まいがね」

「いや、全くその通りだ」

「それではね君、とにかくきれいに参ったと云う一札を入れたまえ」

「それはまたどうしてさ？」

「いや、実はもう五分の後には、君はきつと、それは馬鹿馬鹿しくわかり切ったことだと云うに相違ないからだよ」

「いやいや、僕は決して、そんなことは云わないよ」

「ワトソン君、それでは御説明に及ぶとしようかね」

ホームズは試験管を架にかけて、教授が講堂で、学生たちに講義でもする時のような恰好で話し出した。

「先人の研究材料を基本として、それを単純化して、推論の系統を立てると云うことは、決してそう難しいことでもないのだ。そしてもしこう云う試をして、誰かが中心思潮となつている論説を覆して、更にその聴衆に、新たな出発点と結論とを与えたら、それはたしかに、キザたつぷりなことではあるが、しかし一つの驚歎すべき結果をもたらしたと云つてよからう。さて、君の左の人差し指と拇指の間の皮膚の筋を見て、君が採金地の株を買わなかつたと云うことが、あまり首をひねりまわさない中に解つたと云う

わけさ」

「どうも僕には何の事が解らないね」

「いや誠に御もつとも至極——しかしこれはごく手短かに説明することが出来るんだ。ここにそれぞれ取り外れていた、鎖の輪があるからね。第一には、君が昨夜倶楽部から帰つて来た時は、君の左の手の指のあたりに、白いチョークがついていたこと。第二には、君が玉を突く時は棒の迂りをよくするために、チョークをつける習慣のあること。第三には、君はサーストン氏との外には、決して玉を突かないこと、——第四には君が四週間前に、サーストン氏は、南アフリカの採金地の株式募集をやっているが、その締切りまでは一ヶ月あるので、君にも加入してくれと云つて来たことの話したこと、——第五には、君の小切手帳は、僕の抽斗に入つて錠が下りているが、しかし君はその錠を決して僕に請求しなかつたこと、——第六には、君がこのようにして、この株式に申込をしなかつたと云うこと、——」

「ははははははは、何と云う馬鹿馬鹿しく解り切つたことだ！」

私は叫んだ。

「全くその通りさ」

彼はちよつと不気嫌になつて云つた。

「どんな問題でも、一通りわかつてしまうと君には皆小供だましのようになり切つたものになつてしまうのだ。ではここに未解決の問題があるが、ワトソン君、これには君はどう云う解釈を与えるね？」

彼は一枚の紙を机の上に放り出して、また化学の分析の方に向き直つた。

私はそれを見て驚いてしまった。それは、何かの符牒の文字のようなものであつた。

「何んだ、——これは小供の絵ではないか——ホームズ君！」

私は叫んだ。

「ははははははは、そんなものに見えるのかね！」

「じゃ何なんだね？」

「これは、ノーフォークのリドリリング公領のヒルトン・キューピット氏が、しきりに知りたがっていることなんだがね。この謎の

ような問題は、第一回の郵便配達で来て、その人は二番列車でその後から来ることになっているのだ。ああワトソン君。ベルが鳴っているが、あるいはその人かもしれない——」

重々しい足取りが、階段にきこえたと思う中に、一人の紳士が入って来た。脊の高い、血色のよい、綺麗に剃てられた紳士で、その澄んだ目、輝く頬、——と、ベーカー街の霧の中からは遙に離れた処に生活している人に相違ないと思われた。彼が室の中に入って来た時に、どこか強健なきびきびしたような、東海岸独特の香が、ただよって来るようであった。彼は我々二人と握手を交わして、さて腰かけようとした時に、私が見て机の上に置いてあった、不思議な記号のようなものに目を止めた。

「ああホームズさん、——これをどう云う風にお考えになりましたか？」
彼は叫んだ。

「あなたは大変、奇妙な神秘的なことをお好きでいらつしやるようですが、しかしこれはまた一段と、奇妙不可思議なものでしょう。私はあなたが、私がある前に研究しておかれるようにと思つて、前もつてお送りしたわけです」

「これはたしかに奇妙なものですな」
ホームズは云つた。

「ちよつと見れば、子供の悪戯画のようにも思われるし、また、紙の上を踊りながらゆく、でたらめな小さな姿の、絵のようでもありますね。一たいこんな変な、得体の知れないものに、どうしてそんな勿体振つた意味をつけようと仰有るのですか？」

「いや、私は決してそう云うつもりではないのですが、ただ私の妻が大変なのです。実は妻が全く気絶するほど、これに驚かされたのです。彼の女は何にも云いませんが、しかし私はその目の中に、非常な驚怖を見て取りました。それでそれを穿鑿してみたいと思つたわけです」

ホームズは紙片を取り上げて、太陽の光線をその上に直射せしめた。その紙片は、ノートブックから離し取つたもので、鉛筆で次のような象形が画かれてあつた。



ホームズはしばらくの間、それを検べていたが、やがて、叮嚀に折りたたんで、自分の手帳の間にはさんだ。

「これはとても面白い、稀有の事件かもしれない」

彼は云った。

「ヒルトン・キューピットさん、あなたはお手紙の中では、二三具体的なことを書かれてありましたが、しかしこの友人のワトソン博士のために、もう一度一通りお話し下さいませんか」

「どうも私は説明は拙劣いのですが、――」

我等の訪客は、その大きな強い手を、組んだり放したり、もじもじさせながら、神経質に語り出した。

「いずれお解りにならないところは、そちらの方からお訊ね下さい、――私は去年、結婚した時のことから申しますが、まずその前にお耳に入れておきたいことは、私の家は、決して金持ではありませんが、ここ約五世紀の間は、現在のリドリング村に住んでいて、ノーフォーク地方では、第一の旧家だと云うことです。去年の五十年祭には私はロンドンに来て、ランセル街の宿泊所に滞在しました。それは私の教区の牧師の、パーカーさんが滞在していた関係から、そこを選んだのでした。そうするとそこに、垂米利加の若い婦人が居たのでした。パートリックと云う名前です――すなわちエルシー・パートリックと云う女でしたが、――ふとした機会から、私共は友人になってしまいました。その滞在中に私は、遂に男性並々に、その女と恋愛関係に陥ってしまったのでした。それで私共は早速結婚の手續をすまし、夫婦としてノーフォークに帰って来ました。とにかく少しは知られている旧家の人間が、こんな風にして、全くその身元調査もろくくしないで、結婚してしまうなどということは、とても乱暴なことと思われるでしょうが、しかしそのことは、私の妻を御覧下されて、彼の女を知って下されば、お解りになると思われますが、――

とにかく彼の女は、――エルシーは卒直でした。もし私が訊ねさえしたら、何もかも隠さずに云ってくれたと思っております。「わたしにはとても厭な思い出がありますのよ」こう云って彼の女は語るのでした。「わたしはそれをどうにかして忘れてしまいたいと思いますわ。わたしはもう一切それには触れたくはありませんの。ヒルトンさん、あなたがもしわたしを求めて下さるなら、そりゃ過去において一点の曇もない女性を得ることになると申しますが、しかしいづれあなたは、わたしの言葉を全部信じて下さって、わたしの過去については、何にも訊ねないと云うことを約束して下さい。それでこのお約束が無理だと仰有るのでしたら、どうぞわたしをこのままのこしてノーフォークにお帰り下さい」と、これは私達の結婚の前日に、彼の女が私に云った言葉でした。

それで私は彼の女の言葉をそのまま容れて、その後もこの約束をかたく守つて来たのでした。

そしてその後私共は、この一年の間、結婚生活をつづけて来ましたが、私共は実に幸福でした。しかしほぼ一ヶ月前、——六月の末頃に、私は始めて煩累の兆を見たのでした。その頃は亜米利加の消印のある手紙を受け取つたのでしたが、その時彼の女の顔は気絶しないばかりに蒼白になり、手紙を読んでから、それを火の中に投げこんでしまったのでした。その後は別に彼の女はそれについて何も云いませんでしたし、私もまた約束にしたがつて、そのことについては一言も触れませんでした。しかし彼の女は、それ以来はずっと、一つの不安にとざされていて、とかく顔色が浮かなくなり、何ごとかにビクビクしているようでした。まあ俺を信ずるがよい。俺こそは彼の女の、最もよい伴侶なのだ。私はそう思っていました。しかし彼の女が云い出すまでは、私は切り出すことは出来ません。しかしホームズさん、くれぐれもお含みを願いたいのですが、彼の女はたしかに真実な女性で、もし彼の女の過去に、何か難題のようなものがあるとしても、それは彼の女の欠点ではないと思うのです。私はただノーフォークの田舎者にすぎないのですが、しかしそれでも、英国では第一流の旧家であると云うことは、彼の女はよく知っており、また結婚前からも認めていましたから、まさか彼の女は、その私の家名を汚すようなことは、万々無いと私は確信するのです。

さていよいよこれから、私の話は、奇怪な部分に進みますが、一週間ばかり前、——そうです先週の火曜日でした。私は窓硝子の上に、この紙に画いてあるような、出鱈目な小さな、踊っているような姿が、画かれてあるのを発見したのでした。それは白墨でいたずら画きしたものでしたが、私は既番の少年がかいたのだろうと思いましたが、その若者は、全く知らないと言いはるのでした。とにかくそれは夜かかれたものでしたが、私はそれを洗い落してから、このことを妻に話しました。ところが驚いたことには、妻はそんなものを大変重大視して、もしまた画かれたら、ぜひ見たいと云うのでした。それから、一週間の間は、そんなものは画かれませんでした。ちょうど昨日の朝、またまた私は、庭園の日時計の上に、この紙片がおかれてあるのを見つけたのでした。私はそれをエルシーに見せましたら、彼の女は気絶して倒れてしまったのでした。それ以来彼の女は、全く茫然としてしまつて、いつも恐怖にとりつかれた目色をしているのです。それでその時に私は、この紙片をあなたにお送りして、手紙をさし上げた次第でした。これはまさか警察に訴えても、ただ笑いものにされて、取りあつてくれませぬ、あなたでしたら何とか方法を教えて下さるだろうと考えたのでした。私は決して金持ではありませんが、しかし何か私の妻を悩ましているものがあるとしたら、私は彼女を全財産を賭しても、保護してやりたいと思うのですが——」

古いイギリスつ児のこの人間は、単純で卒直で、目は大きく熱意のこもった、堂々たる風貌の紳士であった。彼がその妻に対する愛情と信実とは、外部にまで溢れ出ていた。ホームズは全注意を集めて、この話を聞いていたが、この話が終ると、しばしの間は、静々と沈黙したまま思案に沈んだ。

「いや、キューピットさん、——」

彼はようやく口を開いた。

「これはやはり、あなたが直接に奥さんにお訊ねになって、あなたに対して秘されていたことを、話してもらうのが一番早道ではないかと思われませんがね」

ヒルトン・キューピットはしかし、その大きな頭を振った。

「ホームズさん、約束はどこまでも約束ですからね。もしエルシーが、話していいと思うくらいでしたら、彼から話してくれるでしょう。そしてまたもし話したくないことでしたら、私は彼の女に対して強要はしたくはありません。しかしそれと離れても、私には私で取るべき道はあるはずですよ。そしてそれを私は大にやろうと思うのです」

「いや、そう云うのでしたら、私も全力をつくして御相談に与りましょう。まずお訊ねしますが、この頃からあなたの御近所に、新に来た者があるようなことはお聞きになりませんか？」

「いえ」

「大変閑静なところだろうと思われませんが、新顔などが現われて、人々の噂に上るようなことがありますか？」

「えい、そうそうごく近所でありました。しかし私共の近所には、湯治場があるので、よく田舎者共が宿をとります」

「この象形文字は、たしかに意味がありましたよ。もし全く出鱈目なものだとすれば、それはもうとても解釈が出来ませんが、しかしこれが組織的なものとすれば、きつとどうにかして解くことが出来ますよ。しかし何しろこれはひどく短いもので、どうにも仕様が無いし、またあなたが持つて来られた事柄も、はなはだ漠然としたことで、考査の基本にはなりませんからね。やはりこれはあなたが、一度ノーフォークにお帰りになって、注意深く監視をして、もう一度この踊り人の姿が現われた時に、正しく写し取った方がいいと思えますがね。先に窓硝子に画かれたものの写しを、見ることに出来ないのははなはだ遺憾ですが、いずれ近所に最近に現われた者に対しても、慎重の注意を向けなさい。そして新証拠が得られたら、またお出で下さい。これがもうあなた

に對しての、僕の最善のお答えです。それでヒルトン・キューピットさん、もし何か新たな展開がありましたら、その時は私はいつでも早速出発して、ノーフォークのお宅でお目にかかりましょう」

この会見の後、シャーロック・ホームズは、しつかり考えこんでしまった。そしてこの後二三日の間、彼はたびたび手帳から、例の記号の画かれてある紙片を取り出しては、長いこと熱心に見つめているのであつた。その後二週間ばかりの間、彼はそのことを、おくびにも出さなかつたが、ふとある日の午後、私が外出しようとしているところを呼び止めた。

「ワトソン君、出ないでいる方がよからうと思われるんだがね」

「なぜ？」

「今朝ヒルトン・キューピットから電報が来たのだ。そらあの舞踏人形のヒルトン・キューピットを知っているだろう。彼は一時二十分にリパブル街に着くと云つてゐるのだ。で、もうやがてここに見えるだろうと思うのさ。その電報を綜合すると、どうも何か重大な新しい出来事があつたように思われるのだ」

やがてまもなく、二輪馬車が全速力で、停車場から我等のノーフォークの紳士を乗せて、来たのであつた。大変悩み衰えているらしく、目は疲れており、額には皺を寄せていた。

「これには全く、すっかり弱らされてしまいました、ホームズさん、——」

彼は半病人のように、腕椅子にもたれ寄りながら云つた。

「どうぞでしょう、——自分の周囲に未知の未見の人間が、何か策動してゐて、しかもその上に妻がもう一寸刻みに、殺されてゆくと考えては、とても我慢が出来ませんでしょう？ いやこれこそ全く生きた気持はありませんよ。いや私の妻は刻々に、弱つていきます。もう刻々に弱つて私の前から消えてしまふそふなんです」

「奥さんは何も仰有いませんか？」

「いえ、何も云いません。しかし彼の女は、云おうとしたこともあつたようでしたが、やはり遂に云い出し得ませんでした。私は妻を助けようと思いました。しかし私はまずかつたので結局彼の女を怖れすくませてしまふだけでした。彼の女は私の古い家庭のこと、私の家庭の地方においての名聞、またその汚れない名誉と云つたようなものについて、言葉を触れさせることもありませんが、その時は私は、いよいよ大切な要点にゆくのだと思うと、もうその中に、話は外に外れてしまふのでした」

「しかしあなた御自分で、気のついたものはありませんでしたか？」

「いやホームズさん、それはたくさんあります、私はぜひあなたにお目にかけてたい、新たな舞踏人の絵を持って来ましたが、それに重大なことは、私はある者を見たのです」

「ある者を、——それはその絵を画いた本人ですか？」

「そうです。私はその者が画いているところを見ました。いやとにかく、最初こう順序を立てて申しませう。私がこの前にお訪ねして帰ってからまず、次の朝に新な舞踏人の絵を見たのです。それは芝生の横にある、物置の真黒い扉の上に、白墨で画かれたものでしたが、私のところの正面の窓から目に止まったのです。私はそれを正確に写し取って来ましたが、これがそれです」

彼は一枚の紙をひろげて、テーブルの上に置いた。それは次の図のような、象形記号と云ったようなものであった。

「素敵！ 素敵！ さあその先を、——」

ホームズは云った。

「私がそれを写し取ってしまつてから、その絵を消してしまいました、その次の朝に、また別のが画かれてありました。それがこの方です」

ホームズは、手をもじやもじやさせ、歡喜の微笑をもらした。

「材料は着々と集まつて来るぞ！」

彼は云った。

「それから三日の後、紙の上に走りかきされた、一枚の通牒が日時計の上の、小石の下に置かれてありました。それはこれです。

御覽の通り、これはすべて同一人のものですがね。それでこの後は私は、一つ待ち伏せしてやろうと思ひ立つて、拳銃を持って、私の書齋に位置を取り、芝生や庭を見張りました。午前二時頃、——私が窓際に腰かけていましたが、外は月夜で仄あかるかったがしかし、その外はもろ暗闇でした。その時私はふと後に、人の気配を感じたと思うと、それは寝巻姿の妻でした。彼の女は私に、寢室に帰るようにと云いましたが、私は卒直に、私たちに馬鹿氣たいたずらをする者を突き止めようと思うのだと告げました。そうすると妻は、それはつまらない悪戯に相違ないのだから、私に深く気に止めないようにと云うのでした。そして「もしこんなことが本当に、あなたを困らすのなら、ヒルトン、私たちは旅に——出れば、こんな五月蠅いことは避けられるではないの」と云う風に云うのでした。「だってそんな馬鹿氣た悪戯に、自分の家を追い出されたりして、世間の笑い物になったりしてはられないではないか、——」私はこう答えました。「えい、それもそうですね。でもとにかく寢室にいらつしやいよ。朝になってからよくお話が出来るじゃありませんか」彼の女は更にこう云うのでした。

しかし彼の女はこう云うと共に、彼の女の白い顔は、それは月光の中としても、あまりに白いと思われるように、蒼白になって来て、手を私の肩にしっかりとかけました。その時に物置小屋の蔭の中に、何か動いているのに目が止まりました。何かいつそう黒い影が、その蔭の角のところを這いまわって、戸口の前に跼まったのでした。私はやにわに、ピストルを持って飛び出そうとすると、妻は両腕でしっかりと私を抱き止めて、顫えるような力で押えるのでした。私は妻を振り放そうとしましたが、彼の女は全く必死でした。私はやつと振り払って、外に出てその物置へ行つた時は、もうその姿は見えませんでした。しかししたしかにその者は来た形跡はあつて、扉の上には例の舞踏人姿の画がかかれてありました。それは以前に二度かかれたものと同じものですが、その写しはこれです。それから私は周囲を残る隈なく探しましたが、もうその他には何の痕跡もありませんでした。しかしそれから更に驚いたことには、その者はその後も現われたらしく、翌朝になって私は、例の扉の上を見ましたら、私が前夜見ておいたものの下に、更に新しいのが画かれてありました」

「その新しいのも写し取りましたか？」

「えい、とても短いのですが、これです」

彼は更に新しい紙片を取り出した。その新しい舞踏人姿は次のようなものであつた。

ズムズム

「いや、ちょっと——」

ホームズは云った。彼は非常に気乗りがして来たらしかった。

「これは最初ののに、ただ附けたしに画かれてありましたか、それとも全く別のものに離して画かれてありましたか？」

「これは扉の別の鏡板にかかれてありました」

「素敵だ！ これは我々にとつては、最も重要なものだ。これではなはだ有望になった。さてヒルトン・キューピットさん、とても面白いですが、その先を云つて下さい」

「ホームズさん、もう何も云うことはないのですが、——ただ私は、その夜妻が、私が悪漢をつかまえるために、飛び出るのを引き止めたことについて怒りました。そうすると妻は、私が怪我をしてはいけなと思つたからと云いわけするのでした。しばしの間は私に、妻はその者の何者であるかを知つていて、またその変な相図もわかつていて、彼の女の案じているのは、私ではなく、向うの者の怪我であると言ふことが、閃きました。しかしまたよく考え直してみると、ホームズさん、彼の女の声の調子にも、また目の色にも、この疑念をかき消させるものがありました。それで私はやはり、彼の女が本当に心配したのは、私自身の身であったのだと考えるのです。これでもう話は終わりましたが、が、さてどうすればよろしいのか、これに対する方法を教えていただきたいのですが。——まあ私の考えとしては、百姓の若者共を五六人も待ち伏せさせておいて、その者が出て来た時に、したたか打ちめして、以後私共に近寄れないようにしようかとも思つていますが、——」

「いや、そんな簡単なことで、収りのつくことではないでしょう」

ホームズは云った。

「一たいあなたはどのくらい、ロンドンに滞在することが出来ますか？」

「私は今日中には、帰宅しなければなりません。私はどんなことがあつても、妻を一人で夜を暮させることは出来ません。彼の女はもう非常に神経質になつていて、どうしても僕に帰宅するようにと云うのです」

「いや、それは御もつともです。しかしもしあなたが、滞在しておられるなら、一両日中にはあなたと一緒に出かけることが出来ると思いますが、——とにかく、この紙は置いて行って下さい。私はごく最近にお訪ねして、この事件に対しては、多少の吉報を齎すことが出来ると思いますから、——」

シャーロック・ホームズは、この訪客が立ち去るまでは、いかにもその職業的な、冷静を保っていたが、しかし彼の容子を見ながらいる私には、彼は内面では、ひどく昂奮しているに相違なかった。ヒルトン・キューピットの広い脊中が、扉の外に見えなくなるや否や、彼は机の上に走り寄って例の舞踏人画の紙を取り出して並べて、とても大変なこみ入った計算を始めた。

二時間ばかりの間、——彼は何枚も何枚も、数字と文字を書いている、その仕事に没頭した。全く私がその室にいるのさえも忘れて、一生懸命に続けた。ある時は多少に仕事が進むもののように、口笛を吹いたり歌ったりし、またやがては、全くその長い謎に閉口してしまったように、額をすくめ目を茫然とさせていた。それから遂に彼は思わずも歓喜の声を上げながら起ち上って、盛んに手をもじもじさせながら室の中をぶらぶらと歩き出した。それから海底電信機式に、長い電報をかいた。

「もしこの返事が、僕の注文通りのものだったらワトソン君、——君の蒐集の中に、また実に素晴らしいものを加えることが出来るんだがね」

彼は云った。

「明日は我々はノーフォークに行つて、あの人間が苦しんでいる秘密事に、決定的な新たな展開を与えることが出来そうだ」

私はとても好奇心をそられてしまった、しかしまた私は、彼はいつも自分の方から、いい時を見計らつて話してくれることはよく知っているのです、私の方から訊ねることはしなかった。